

「生き抜く知恵と信仰」～ヨブ記から～

2017年 2月25日（土）

海老原道雄

はじめに

聖書学院ご卒業おめでとうございます。河先生から、卒業式の日公開授業を計画していること、そして私にヨブ記から、その授業をお願いしたいとお聞きしました。昨年定年退職を機に、教会の役員会から私の説教を本にしたいと言われまして、ヨブ記とフィリピの信徒への手紙の説教を本にしてくださいました。ヨブ記は、丁度 10 年前に教会で 35 回にわたって説教したのですが、出来上がりましたものを河先生にお贈りし、それを読んでくださって、今回の話になったのではないかと思います、お引き受けいたしました。

この授業のテーマを「生き抜く知恵と信仰」としましたが、何か荒れ狂う荒波を乗り越えて、というようなイメージもあるかと思いますが、聖書学院を卒業される皆様のこれからの生活の場がいかようなものであろうとも、しっかりと信仰をもって歩み続けていただきたいという単純な願いから出た言葉です。耳を傾け、一緒にヨブ記のみ言葉からくみ取っていただければ幸いです。

人生 90 年の計画を

日本は世界でも名だたる長寿国となりました。日本人の平均寿命の推移を調べてみました。1921 年から 1925 年の平均寿命は男性 42.06 歳、女性 43.20 歳。人生 50 年にも満たなかった時代がこの時までずっと続いていたのです。それが戦後 1947 年になると、男性 50.06 歳、女性 53.96 歳、ようやくここで初めて人生 50 年の壁を越え始めました。この次の年から毎年男女ともに平均寿命は伸び続け、2015 年には男性 80.79 歳、女性 87.05 歳となりました。今、65 歳の男性の場合、平均余命は 19.46 年（84 歳までということになります）、女性は 24.31 年（89 歳まで）であります。60 歳、あるいは 65 歳で定年退職を迎えてから、尚 20 から 25 年も人生が続く時代なのです。

長寿国日本、おめでたい話でもあり、悲しい話でもあります。＜長寿のリスク＞などという言葉も使われています。長寿にはどんなリスクがあるのか？そこで指摘されているのは健康と経済の問題です。健康のまま死の直前まで生きて、そのまま人生を終えられる人はどのくらいいるのでしょうか。健康寿命という言葉もあります。10 年くらいは病気を抱えてから最後を迎えるというのが平均的な人生の最期だと考えられています。病床に伏し、介護を受ける話には現実の厳しさを思わずにはおれません。加えて経済の問題があります。長く生きるには、生活費が底をつくことがないような準備が必要です。一体、どれだけのお金が必要なのでしょう？その準備ができない場合、どうすればよいのでしょうか？こうして見てきますと、否応なしに人生 90 年の計画を立てることが必要な時代に私たちは生きています。かつて、「人生の四季」を書いたポール・トゥルニエは、人生を 20 年ごとに区切って 60 歳からは冬の季節で、最後を迎える備えが必要と言っていました。今の 60 歳の人には現

実離れした言葉と受け取られるのではないのでしょうか。50年しか生きられなかった時代の多くの人々が長く生きたいと願っていた、その願いが、今、実現しているのですが、しかし、願いがかなってみると、そこに見えて来たものは、予想外の厳しい現実でした。勿論、健康や経済の問題さえなければ、幸せだということでもありません。

人生いろいろ

「人生いろいろ」という題の歌がありました。ネーミングが分かりやすいですね。それに、歌っていた女性歌手の人生が、この歌通り、波乱万丈だったということもあって、大勢の人の共感を呼び、ヒットしました。長く生きればいろいろな人の生きざまを身近に見たり聞いたりします。時代の変化、自分自身の変化を見て、自分の周囲の人々の生きざまを見れば、そこには何の法則も当てはまらないのではないかと思ってしまう。「人生は不可解だ」と言って栃木県の日光の華厳の滝に飛び込んだ大学生の話や、高校時代の倫理社会の授業で聞かされました。その先生は、高校生3年生の私たちに、「これからは宗教の時代だ。宗教をやれ。」と真顔できっぱりとおっしゃったのには驚きました。「宗教をやれ」とはどういうことか？その時、私は教会に行き始めていたのです。

多くの情報に接すると、かえって不安ばかりをあおられて希望を失いかねません。悲惨な現実を知るだけでなく、現実的、実際的な対応ができるためにはどうすればよいのでしょうか。「生き抜く知恵と信仰」が求められます。それを旧約聖書ヨブ記から学びたいと思います。

ヨブ記が読まれる理由

旧約聖書の中でヨブ記に興味を持つ人が少なくありません。皆さんはヨブ記をお読みになって、どんな感想をお持ちになりましたか。実話なのだろうか？文学のようなものなのだろうか？

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（1章 21節）とあるように、ヨブ記の最初で、すでに結論が出てしまっているのではないかと。また、42章 6節に「それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」とあって、ヨブは友人たちとの議論では結論が出ず、神さまにも自分の正しさを主張した挙句、結局は悔い改めたのですから、ヨブ記は最初と最後だけで十分なのではないか？その間の文章は必要だろうか？結局、パッピーエンドで終わる人生の秘訣は信仰ということではないのか？などと、思わないのでしょうか？率直な思いを持ちながら、読み始めてはみたものの中だるみを経て、最後にたどり着くのが落ちなのではないでしょうか？

私が最初にヨブ記に興味を持ち始めたのは大学生の時でした。内村鑑三のヨブ記の聖書注解を手に入れました。内村の文章には読み手を引き込む力があります。それに、内村自身が、いわゆる不敬事件、教育勅語を一高の校長が読み上

げる時に、内村は最敬礼をしなかったと批判されて、結局教師の職を奪われ、非国民と批判された事件の当事者となって、さんざん辛苦をなめた経験が背後にあります。ヨブの苦しみが内村の苦しみと重なって、世の不条理にどう立ち向かえばよいのか、信仰者としての課題が突き付けられたのです。

きっと、そのような批判の矢面に立たされたり、苦難を経験した人にとって、ヨブ記は、説得力をもって寄り添ってくれる書のようにあります。苦難の意味を問う書であるだけでなく、生きるということ、信じるということの根本を問う書ですから、繰り返し読み、そこから謙虚に聞くことは、たいへん意義あることだと言えます

人生の幸せのバロメーターは？

さて、人の理想的な幸せの姿とは、どのようなものでしょうか。現代は価値観が多様化して、幸せの形を一つに絞ることはできません。自分が願っていることを他人から評価されたくないという思いを持つ人が多いことを承知の上で、あえて、一つの理想の形を表現するとすれば、次のようなものではないでしょうか。それは、家族に恵まれ、健康と財産に恵まれ、友人に恵まれ、神を信じて謙虚に生きる姿ではないでしょうか？加えて、それが社会からも高く評価されている。いわば、幸せな家庭、多くの資産、社会的な名誉に健康があれば、これに優る幸せはない、と考える間違いはないのではないのでしょうか。ヨブ記が書かれた時代であれば、尚のこと、こういった理想の姿を描けると思います。現代の日本では、勿論、家族がいなくても、資産が無くても、名誉が無くても、健康でなくても、幸せだという人はいますが、それは、これからの話として、とりあえず、多くの人々が願っている理想的な幸せな人とは、このような人でしょう。これこそヨブの姿でした。世間一般で言われている幸福な人とはこういう人、という人物ヨブが登場します。これがヨブ記の出発点です。

すると、出だしから、この書は世間の常識を打ち壊そうと言う狙いをもって書かれていると分かるのです。よくできた妻と多くの子どもに囲まれ、多くの資産があり、家族が皆健康であり、それに名誉が引っ付いて居れば「鬼に金棒」、というところでしょうか？ところが、たちまちにしてヨブの人生の土台が崩れ去ります。良いものを築き上げるには多くの時間がかかりますが、崩れ去るのに時間は要りません。自然の災害や犯罪や病気は、すきを窺うように待ち構えているかのようです。人が願うものすべてを手にしてきたヨブは、それらのものをすべて失うことになります。ここで興味深いのは、すべてを失うことになる舞台裏、その背景です。ヨブ自身の罪や失態や過失が原因ではなく、まったく別の原因がヨブ記 1章で語られています。いきなりサタンが登場し、ヨブを打つようにと神に語りかけています。人間の世界ではない、天上の世界で、しかも神はサタンの言葉に耳を傾け、それを受け入れるということから、ヨブの悲惨な出来事は始まります。

なぜ、人は苦しむのか？しかも、神の前に正しいとされていたヨブのような人が、どうして苦しまなければならないのか？ヨブ記 1章は、ヨブ本人のあずかり知らないところでヨブを試みる計画が練られたと記します。ヨブは、こ

のことをまったく知りませんので、彼の苦悩は時間の経過とともに深くなっていきます。幸せな人生を彩る一つ一つの要素が、時を経るごとに消えていきます。子どもたちが消え、財産としての家畜が消え、妻も消え、自らの健康も失われます。1章から2章にかけて、理想とされている人の幸せの要素すべてが無くなります。この世の幸せを失った一人の男の苦悩が始まります。それは不幸の始まりに見えて、実は、真の幸いを見出す物語のスタートではないでしょうか。

人の預かり知らないところで、その人の責任がまったく問題とされないところで、その人を苦しめる計画が立てられる。何ということでしょう。私たちは誰一人自分で生まれる時や場所、親を選ぶことが出来ません。それは、自分が生きる人生の舞台は、自分では決められないということであり、すでに設定されている自分のための舞台で、とにかく生きるしかないのです。

ヨブ記は、理想とされている人の幸せの要素を、根本から否定しているかのようです。財産と多くの子どもと健康が人の幸せのバロメーターだと言えるのか？子供がいるということ、子どもが多いということが何だ！財産が多いということが何だ！健康が何なのだ！それが無ければ幸せではないと言うのか！このように常識を向こうして、この書は挑戦状をたたきつけているのではないのでしょうか？幸せだったヨブが不幸づけにされます。それによって、何を私たちは学ぶことが出来るのでしょうか。

ヨブ記は常識への挑戦の書

ヨブ記が扱うもう一つのテーマがあります。それは<因果応報>という考えの再考察です。ヨブが財産を失い、子どもを失い、自分の健康までも失った後、3人の友人たちがヨブを慰めるためにやって来ます。しかし、想像を超えたヨブの姿に一同、声を上げることが出来ません。時が経ち、友人たちは、慰めの言葉ではなく、悔い改めを促す言葉を語り始めます。友人たちはヨブが何か具体的な罪を犯したから、こんな苦難を受けているのだと決めてかかっているのです。友人たちの考えは因果応報の思想を土台としています。苦難は罪の結果だと。人は正しければ苦しまない、などと今言えば、誰でも反論するでしょう。しかし、妙なものです。信仰は、時に人の考えをゆがめてしまいます。勿論、信仰が悪いのではなく、その人の信仰の在り方に問題があるのですが……。確かに、天上でのサタンと神との相談の前までは、ヨブの人生は因果応報の理論がスポットあてはまりました。ヨブは、自分の正しさゆえに、神に祝福されて家族に恵まれ、財産に恵まれ、健康であって、名誉を得ていたと言っても良い。それほどヨブの人となりはずばらしく、また、神もヨブの正しさゆえに彼に祝福をお与えになった、と人々は見ていたのです。しかし、では、その後のヨブの悲惨な姿をどう説明することができるか？そこでも相変わらず因果応報の論法が起用されます。彼には隠された罪があったのだ、ということでした。

私たちが身に着けている一つの習性、それは、いちいち説明をしたがるということですが。理解しにくい現象でも、何とか理屈をつけて説明しようとするの

です。分からないことを、分からないと言うことができないのです。友人たちの説明では、ヨブには隠された罪があるはずだということでした、そうでなければ、彼の苦難は説明がつかないからです。悪い結果を刈り取るのは、悪い原因、悪い種を蒔いたから生じたのだと。だから隠された罪を公にして悔い改めれば、神は憐れみを施してくださるにちがいないから、ヨブよ、ためらわずに今すぐに、自分の罪を認めて悔い改めよ、と迫るのです。

因果応報は本当なのか？「蒔いた種を刈り取る」と言いますが、あまりに一面的で、この言葉を持って人の人生を一刀両断できるものではないのに、伝家の宝刀の如くこれを使うのは、決まって律法的な人です。いつも正論を吐くのです。言っていることに間違いはないのですが、聞いていると、何かが違うと思わざるを得ない。正論であるにもかかわらず説得力に欠けるのです。聖書には、なぜ、悪人が栄えるのかと戸惑い、嘆き、訴える詩編も記されているのではないのでしょうか（詩編 73 編など）。善を行っても報いはないように思えるのは、多くの人を経験していることではないのでしょうか。権力を持つ人の横暴の前に力の無い者が抑圧されるのは、いつの時代でも見られた光景ではなかったのでしょうか。イスラエル民族の歴史そのものが、それを証していたのではなかったのでしょうか？何よりもイエスさまの十字架は、このことを最もよく表しているのではないのでしょうか。因果応報の思想は、使い方次第で他者を断罪するだけで終わってしまいます。それを使うあなたの判断が正しいと、どうして言えるのか？

3人の友人たちとヨブの議論は3回にわたって続きます。第1回目は4章から14章、第2回目の議論が15章から21章、第3回目の議論は23章から27章まで続きます。互いに譲りません。それぞれが自分の主張の正しさを納得させようとしますが、相手も同じ思いですから、議論は平行線をたどります。

28章からヨブは知恵について語り、自分の半生を回顧し、31章でヨブは自分の潔白を神に訴えます。

32章に入ると、今度は全く別人エリフが登場し、ヨブを説得できなかった3人の友人たちと、ヨブと、双方を責める役回りを演じます。そして、37章まで続くエリフの言葉は、その後の神の言葉への導入となります。しかし、エリフは神の偉大さを強調して突如退場してしまいます。なぜ、正しい人が苦しまなければならないのか？因果応報の思想では説明がつかず、結局のところ、ここまでは結論が見出せません。

信仰が問われる

エリフの話が終わると、38章1節「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった」と記されて結論へと向かいます。苦難を巡って人間の知恵を尽くした攻防は、どちらが勝者とも言えず、知恵の限界を露呈しました。ここで神が沈黙を破って語りだされるのです。

「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは。

男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。
わたしが大地を据えたとき お前はどこにいたのか。知っていたというなら理解していることを言ってみよ」(38 章 2～ 4 節)。

今まではヨブが神に問うていたのに、今度は神がヨブに問われるのです。ここからの神の問いかけは、ヨブにだけ向けられているのであって、3人の友人たちにはこの質問は向けられていないのです。神に問いかけていたのはヨブだけであって、友人たちは自分の考えを繰り返し述べただけでした。彼らには神に問うとい姿勢が見られなかったのです。神に変わっておしゃべりをしていただけだったのです。律法的な生き方の典型であります。

そして、ヨブが繰り返し神に問うていたのに対して、神はヨブの質問への答えをお語りになるのではなく、逆にヨブに問うことによって、ヨブに答えを見出させようとされているのです。神からの問いの内容は、この後次々と言葉を変えて語りだされます。自然界の事象に関する質問から始まり、動物のことまでと幅広い内容です。

そして 40 章に入るとどめを刺すようにこの言葉が語られます。
「全能者と言い争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい」(40 章 2 節)。

これにさすがのヨブも答えようがなく

「ヨブは主に答えて言った。わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません」(40 章 3～ 5 節)。

しかし、神の追及はやみません。

「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。
男らしく、腰に帯をせよ。お前に尋ねる。わたしに答えてみよ。お前はわたしが定めたことを否定し自分を無罪とするためにわたしを有罪とさえするのか。お前は神に劣らぬ腕をもち神のような声をもって雷鳴をとどろかせるのか。威厳と誇りで身を飾り 栄えと輝きで身を装うがよい。
怒って猛威を振るい すべて驕り高ぶる者を見れば、これを低くし
すべて驕り高ぶる者を見れば、これを挫き 神に逆らう者を打ち倒し
ひとり残らず塵に葬り去り 顔を包んで墓穴に置くがよい。
そのとき初めて、わたしはお前をたたえよう。お前が自分の右の手で勝利を得たことになるのだから」(40 章 6～ 14 節)。

かつて、「存在するものはすべて理性的であり、合理的である」と語った哲学者がいました。今、こんなことを言う学者はいません。存在するものの不合理、非合理性に気が付いたからです。理性を磨けば、何でも分かるという時代は、分からなかった事の大きさ、多さに気がついていなかった時代の言葉でした。人間に分かることはごく一部分にすぎないのではないのでしょうか。

人間中心の座標軸しか持てない者に、どうして人間の立ち入ることのできない世界、自然や動植物の世界で起こっている事象の説明がつくのでしょうか？まして、神のご計画の一部始終を！

ようやくヨブは告白します。

「あなたは全能であり 御旨の成就を妨げることはできないと悟りました」
(42 章 2 節)。

「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し自分を退け、悔い改めます」
(42 章 5 節～ 6 節)。

ヨブは、自分が完全ではないことを知ったのです。耳で聞いて信じていた神さまでしたが、今、自分自身の災いと思える事柄の中にも、実は神が働いておられるのだと知ったのです。自分の思いを吐露するだけでなく、それを絶対視して神に要求することの過ちを認めたのです。律法の規定通りに動物の犠牲を捧げることで罪を悔い改めるのではなく、自らの罪の贖いを心から求める者へと変えられたのです。

創造者である神への信頼、創造者への信仰は、自らの罪が贖われることを期待する信仰、贖いの信仰と一つになるのです。

どんな境遇にあっても

人生 90 年の計画が必要だと、冒頭で申しましたが、実のところ、それを考え出すには自分の中に知恵がありません。これから先の何十年ものことを予想できないからです。出たとこ勝負だ！としか言いようがありません。計画を立てたところで、何度も何度も計画変更をすることになりそうです。しかし、想定外の事が送ることを承知の上で、しっかりとこれだけは、と言える大切なことをえて挙げるとすれば、新約聖書で使徒パウロがフィリピの信徒への手紙の最後に記した言葉ではないでしょうか。

「わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ 4 章 11 節～ 13 節)。

愛する子どもとも別れの時が来ます。自分で築き上げた財産を持って行くことが出来ない時が来ます。健康のまま最後を迎えることはできないのです。自分のあずかり知らないところで、何か画策されているのかもしれませんが、それでも私たちは主にあって、いつどんなことが起きても、それなりに対応することは不可能ではないのです。ヨブの結末は、試みを受ける前の状態よりも大きな恵みを受けていますが、量的、数的な大きさが大事なのではなく、ヨブの信仰が、因果応報の呪縛から解放されて、神の恵みに生きることになり立ち帰ったことにあります。聖書学院を卒業された後の日々の生活に神さまの祝福が豊かに

ありますよう祈ります。